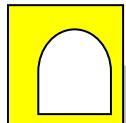


# 日吉台地下壕保存の会会報



第138号  
日吉台地下壕保存の会

## 2019年度総会のお知らせ

副会長 亀岡敦子

日吉台地下壕保存の会は、1989年4月に第1回総会を開き、永戸多喜男会長、寺田貞治事務局長ほか、設立に尽力した人たちの思いを反映して、およそ100人の実に様々な人が参加し、発足しました。30年を経て会員数は3倍以上となり、活動の幅も広がりましたが、横並びの緩やかな会の基本姿勢は変わりません。

全国には、私たちのように、その地域に根差した戦跡保存の団体が数多くあり、それぞれの条件の中で、出来る限りの活動を行っています。実際に軍が使用していた建物や地下施設、門柱や土台の一部など、調査と説明が必要なモノが多く、また所有者も様々です。しかし、近年いくつかの自治体が、戦跡保存と活用のため、その土地を買いあげる動きが出てきました。地道に活動を続けた保存団体の力に負うところが大きいと思われ、私たちにも、大きな励みとなります。

今年も、会員の皆さまに総会のお知らせをいたします。30年間一度も途切れることなく、活動し総会を開くことができましたのは、会員の皆さまの支えのおかげと感謝申し上げます。恒例の記念講演は、今年は考古学者の慶應義塾大学教授安藤広道氏にお話していただきます。

「日吉と鹿屋」と題して、指令を出した日吉と、指令を受けた特攻基地鹿屋の地下壕調査に基づく貴重な講演です。どうぞ緑豊かなキャンパスにお運びくださいって、総会にご参加いただきますよう、お願ひいたします。

日時：2019年6月15日（土）

13:00～16:00

会場：慶應義塾日吉キャンパス

来往舎大会議室

記念講演 13:00～14:45

演題 「日吉と鹿屋」

講師 安藤広道氏

慶應義塾大学文学部教授（考古学）

総会 15:00～16:00

- ・2018年度活動報告
- ・2018年度会計報告
- ・2018年度会計監査報告
- ・2019年度役員選出と承認
- ・2019年度活動方針の提案と承認
- ・2019年度予算の提案と承認

### 【目次】

<u>巻頭言</u> 【1p】2019年度総会のお知らせ	副会長 亀岡敦子
<u>公開講座</u> 【2-7p】「戦争体験者のお話」	
ガイド 養成講座第3回	
☆元慶應学徒兵 岩井忠正さんが伝えたいこと	運営委員 遠藤美幸
☆私が1年と9ヶ月海軍生活をした体験談	
（元海軍電信兵 近藤恭造さん）をきいて	運営委員 小山信雄
<u>報告</u> 【7p】軍艦の戦後-軍艦防波堤	運営委員 佐藤宗達
<u>連載</u> 【8-9p】海外の戦跡めぐり（11）	
マニラ市街戦、比共和国	運営委員 佐藤宗達
<u>報告</u> 【9-10p】出征軍馬の水飲み場	運営委員 遠藤美幸
<u>報告</u> 【11p】地域のチカラ最終報告会	運営委員 小山信雄
<u>連載</u> 【12-14p】	
☆第一校舎ノート（16）正面玄関の鷲（その2）	会長 阿久沢武史
☆地下壕設備アレコレ（25）カマボコ兵舎と壕内寝台	運営委員 山田 譲
<u>お知らせ</u> 【15p】	
☆第24回2019平和のための戦争展inよこはま	
☆第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会2019年	
<u>活動の記録</u> （2019.1～4月）【16p】	

**公開講座****「戦争体験者のお話」ガイド養成講座第3回 (2019.4.6)****慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎2階 中会議室**

元海軍軍人だった、岩井忠正さん、近藤恭造さんのお二人に、お話を伺いました。受講者9名を含む33名が、赤裸々な体験談に熱心に耳を傾けました。

元慶應学徒兵・岩井忠正さんが伝えたいこと 運営委員 遠藤美幸

1943(昭和18)年10月、慶應義塾大学在籍時に「学徒出陣」で、人間魚雷「回天」や人間機雷「伏龍」の特攻隊に配属された岩井忠正さん(現98歳)が、懐かしの日吉キャンパスで戦時中の体験談を語った。

岩井さんは1920(大正9)年生まれ。今年の5月で白寿を迎える。10人兄弟の下から2番目。陸軍少将を父にもち、父の赴任先の中国の大連で育つ。慶應義塾大学法学部政治学科に入学するが、予科3年時に哲学に開眼し、文学部哲学科に転部。旧制大学は予科3年、本科3年の6年制である。予科は現在の大学の教養課程に相当する。当時の岩井さんは、西田幾多郎らを中心とした京都学派を學問的に批判したいと考えていた。今ある理論、今ある体制にただ盲従することなく、客観的に批判的にものごとを考える眼は日吉時代に養われたそうだ。大連の中学校時代も、日吉での予科時代も学校教育に「軍事教練」が含まれていた。岩井さんによれば、軍事教練では配属将校が陸軍式の訓練を実施し、中学の4、5年生で本物の銃を使った執銃訓練を行い、大学卒業前には小隊長程度の経験と知識が身についていたという。慶應の予科時代は軍事教練の一環として富士山で野外演習が行われた。

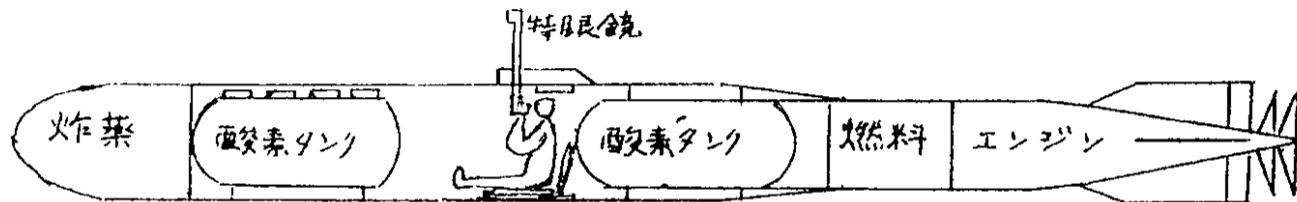
1943年10月、天皇の勅令により、旧制の大学、高等学校、専門学校の学生・生徒の徴兵猶予が廃止される。岩井忠正さんも哲学科2年時で徴兵猶予の停止となり、徴兵検査を受けることになった。京都大学に入学したばかりの2歳下の弟の忠熊さん(現96歳)も同じく徴兵猶予の停止となった。兄弟で海兵団に入団が決まっていたが、入団前に二人は、山形県米沢市の先祖の墓参りに行った。向かう汽車の中で忠正さんは弟に向かって「俺たちはこの戦争で必ず死ぬだろうが、俺は『カイザー』のために死ぬのでない」と告白すると、弟も「俺もそうだ」と答えたのである。

カイザーとは独語で「皇帝」だが、咄嗟に「天皇」の意味で使った。当時は天皇のことを軽々しく口にすることはできなかった。忠正さんは「私と弟がとくに利口だったわけではなく、学徒兵の多くが『天皇制』に疑問をもち、成算のない戦争に駆り出されていることに気づいていた」と語る。国策に反対する言論は封じ込められていた時代、死ぬ前に兄弟だけで本音を共有したのだ。1943年12月10日、兄弟そろって横須賀の海兵団に海軍予備学生として入団し、二人とも「特攻隊」の訓練を受けることになった。



講演される岩井忠正さんとご息女の岩井直子さん

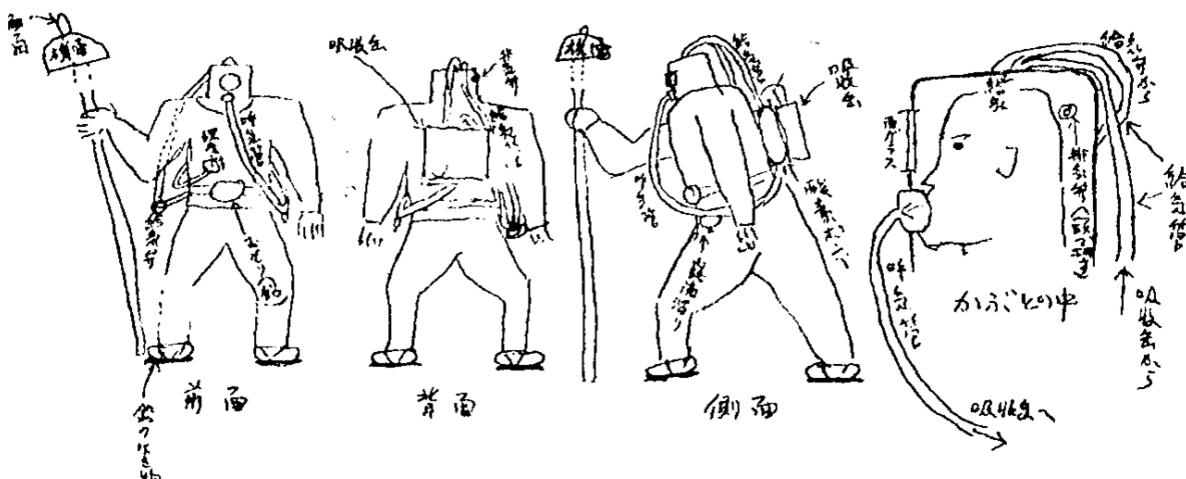
忠正さんは最初に光基地(山口県)で、先端に1.6トンの炸薬を装着した人間魚雷「回天」の訓練を受けるが、1945年6月に久里浜(神奈川県)の人間機雷「伏龍」の部隊に転属になる。弟の忠熊さんは、爆弾を積んだベニヤ板の粗末な小型艇の「震洋」で体当たりする特攻兵器の配属となった。



回天の構造の概略 (最大径1.0m、全長14.75m、画・岩井忠正)

伏龍の訓練地は横須賀の野比の海岸であった。伏龍とは本土決戦を念頭に置き、米軍を水際で壊滅する目的で考案された特攻兵器だが、粗末な潜水服、性能の悪い呼吸装置を背負い、武器は竹竿の先端の機雷で、海底を徒步で移動する「自爆兵器」である。鉛の草鞋やベルトを装着し、浮き上がらないように前傾姿勢で歩行しなければならない。面ガラスを通して見えるのは海底の砂地のみで、海上を通る敵艇を竹竿で突くのは所詮無理な話であった。結局、伏龍は実戦に使用されることはなかったが、訓練中に多くの若い隊員が事故死した。その主な原因是、背中に背負った酸素ボンベと吸収缶の不備や取り扱いによる。鼻で吸って口で吐くという呼吸を正しく行わないと水中で炭酸ガス中毒になり失神し、最悪は死に至るのだ。忠正さんによると、吸収缶には苛性ソーダ(水酸化ナトリウム)が入っているが、その缶に水漏れがあると濃厚な苛性ソーダ溶液を頭から被り、呼吸とともに液体が気道から肺まで焼いて死亡する事故が頻繁に起きたそうだ。忠正さんは13名の伏龍隊の隊長であったが、幸いに部下に事故はなかったが、忠正さんが酸素不足で死にそうな体験をしている。

岩井忠正さんは、「時流に身を任せてはいけない。私は簡単に身を任せてしまった。あの戦争を嫌悪していたのに、将校になり、特攻部隊にも所属してしまった。沈黙は中立ではない。沈黙はその体制を作り、強化することに繋がる。これは現在でも当てはまる。体制に無批判に順応しているととんでもないところに連れて行かれる。沈黙してはいけない！このことを私は若い人に一番伝えたい」と熱弁された。まるで70数年前にこの日吉にいた若き岩井青年に諭すようにも聞こえた。岩井忠正さんのように学生生活を謳歌し学問に真摯に向き合っていた学徒兵の多くが戦没した。岩井さんの後ろにいる十数万(全戦没学徒兵の正確な人数はわかっていない)と言われる学徒兵の無念を決して忘れずに胸に留めておきたい。



海底を歩く海の歩兵 伏龍 (画・岩井忠正)



地球儀カップ 第一校舎前



軍事教練 銃剣術 第一校舎前



軍事教練 日吉グランド 後方：第一校舎

**私が1年と9ヶ月海軍生活をした体験談  
(元海軍電信兵 近藤恭造さん) をきいて**

運営委員 小山信雄

3年前のガイド養成講座で近藤恭造さんに海軍時代のお話をして頂きましたが、今回改めてお話ししていただく機会を得ることが出来ました。1943（昭和18年）、近藤さんは、14歳で海軍に志願され、翌年（昭和19年）10月、敗色深まる中、日本の命運をかけた、連合艦隊最後の決戦場とも言うべきフィリピンの海戦に通信兵として参加されました。海軍に志願された経緯や、激戦の生々しい体験談などとても貴重なお話を伺うことができました。会報のバックナンバー（第125号：2016.4.26、第129号：2017.2.22）に詳しく書いてありますが、今回改めて感じたことを中心に以下述べます。

**はじめに：**

「戦争の話はつらくて、きつくてつらいというイメージあるが、私が1年と9ヶ月、海軍生活をした体験を、実際の真実を話すことによって、亡くなった戦友への供養になる、という観点から私が体験した海軍生活を聞いてもらえるとありがたいと思います」とのことでのお話を始めいただきました。

生い立ちから海軍志願まで (1929.1.10~) :

お生まれは、東京都荏原区（現在の品川区・戸越銀座）。洗足池、多摩川、等々力渓谷など大自然の中で、かくれんぼ等で遊ぶ。1941.3 高等尋常小学校を卒業し、神田電機学校に進む。電気工事等の資格を取る為の「弱電」を選び学んでいたが、世の中は戦争色が一段と濃くなり、級友の席がぽつんぽつんと空席が目立つようになり勉強どころではなくなって来る中、あと1期を残す時点で国の為に志願することを決意。海軍を志願することになったが、電気を学ぶ上で必須科目であった「英語」の先生の影響が大きかった。当時は学校に配属将校制度があり

(主に陸軍) 軍事教練の指導などに当たっていたが、髭をはやし「オイ、コラ、オマエ！」等日常茶飯事に威張り散らしていたのに対し、英語の堀田先生は違った。海軍退役少佐で、米国に海軍駐在武官の勤務経験のあるアメリカ通の温厚で紳士的な先生で、英語の授業のみならず、ヤンキー気質についても分かり易く教えてもらい、志願するのなら陸軍よりも海軍ということになった。



講演される近藤恭造さん

海軍入隊から空母瑞鶴への配属 (1944.1.10~) :

近藤さんは、14歳の時に「海軍特年兵」に志願し、奇しくも15歳の誕生日（1月10日）に、山口県の防府海軍通信学校に入校。初めての軍人生活としての新兵訓練として、受信訓練、手旗信号、並びに真冬の海（瀬戸内海・三田尻湾）でのカッター訓練の毎日を過ごすが、ひと月足らずで横須賀海軍通信学校に転属となる。ここで「第70期（偶数は志願、奇数は徵兵）海軍通信学校普通科電信術練習生」となり、50名の「特信班：海軍の特務機関の通信諜報を担当する組織」要員として選抜となり、通信教室通りが始まった。横須賀では、伊式銃（三国同盟でイタリアに供与した残りの銃）を携えての夜間の歩哨勤務も経験した。

**【近藤恭造さんの経歴・軍歴】**

昭和4年1月10日生	品川区荏原
昭和19年1月	神田電機学校本科4期（弱電）・海軍入隊のため中退 ⇒ 防府通信学校入校
2月	久里浜通信学校入校
3月	鈴川通信隊（静岡県）入隊・特信班 教育・訓練を受ける
10月	第70期普通科練習生特信課程卒業 第一機動艦隊司令部・空母瑞鶴 配属 上等兵に昇任
11月	大和田通信隊配属
昭和20年3月	水兵長に昇任 9月 復員 二等兵曹に昇任
10月	米軍第8軍化学部隊勤務
昭和25年9月	警察予備隊（後に陸上自衛隊）勤務
昭和54年1月	自衛隊定年（50歳）退官 横浜国立大学勤務
昭和64年1月	横浜国立大学定年退官 証券会社入社
平成4年4月	証券会社退職 日本ビルメンテナンス入社
平成26年6月	日本ビルメンテナンス退職
現在	神奈川県逗子市在住

4月に入り、再度転属命令があり、静岡県の鈴川海軍通信所（現在の富士市）に移動となり、ここで漸く「特信」の教育が始まった。約7か月間、特信班教育がみっちりと行われた。アルファベットの1分間120字聞き取り、電鍵の1分間120文字打ち等の聴力向上、手首鍛錬（特殊海軍体操）、受信速度向上のための訓練、英会話（当時、英語は禁止されていたが、ここでは日常会話は簡単な英語で行われていた）、そして対米教育（ヤンキー気質、アメリカ人はどういう様な性質を持っているか？）等を叩き込まれた。

レイテ沖海戦（エンガノ沖海戦）(1944.10.23～10.25)：**【海軍特年兵】**

帝国海軍が、満14歳で募集した史上最年少の志願兵。少年兵よりもさらに若い特例に基づいたものであったため、特別年少兵、特例年齢兵とも称され、略して

**【特年兵】**と呼ばれる。1942(昭和17年)の1期から4期まで総員17,200名を採用し、戦没者は5,000名。東郷神社に「海軍特年兵の碑」が建立され、例年、慰靈祭が執り行われている。

沈みつつあった。艦が徐々に角度を上げ、まっすぐに立ってからバアーッと沈んだその時に、みな片手で泳いで敬礼をしていた。近藤さんも左手で泳ぎながら右手で敬礼。いつの間にか「海行かば」の合唱が始まっており、今でも鮮明に耳に残っている。沈没時にはみな「ばんざい」と叫び、海中での大爆発が2度あり、もの凄い水圧で心臓が止まりそうな衝撃を受けた。今となっては夢の様なことだが、実際に体験したこと。F6Fグラマンは漂流中の日本兵にも攻撃をしけけ、固まって漂流していると機銃掃射の標的となつた。実際、目の前で機銃掃射されることもあったが、「天皇陛下ばんざい」などとは誰も言わない。「おかあさん」と言って死んでいった。

その後(1944.10.26～ )：

漂流中、駆逐艦「若月」に救助され、その後、軽巡洋艦「大淀」、航空戦艦「伊勢」に乗り継ぎながら、目的地である呉の軍港に入港することができた。自分は海軍を志願して親不孝だったと感じたが、運よく生還出来た。上陸後は、大和田海軍通信隊(埼玉県新座市)への転属命令があり勤務を開始。東久留米駅から徒歩40分ほどの野火止という畠の広がる地域で、10数本のアンテナが林立する電波状況が優れたエリアで、本来は防衛省が使いたいところであろうが、在日米軍が手放そうとしない(これは現在の話)。1945.8.15の終戦後、9.1に大和田より復員。その後の経歴は表の通り。講演の最後に「戦争で亡くなられた方々のご冥福と、あの悲惨な戦争と『戦災孤児』『学童疎開』を体験された方々のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます」との言葉でお話を締めくくられました。

感想：近藤さんの講演は来往舎で2回目となりましたが、私は今回初めてお話を聞くことになりました。会報での情報や、昭和39年に近藤さんが書かれた手記は読んでいたため、おおよそのイメージは出来ていましたが、直接お話を聞くことで大変感銘を受けました。瑞鶴か

10月、鈴川海軍通信所での訓練が修了し、近藤さん等10名の特信班員の配属先が、「第一機動艦隊司令部」と決まった。卒業式後、呉鎮守府へ向かうも、艦隊は出航中であったため、大分海軍航空隊に行くよう指示され、4日間当地で過ごし、初日、二日目と早朝の飛行隊の見送りを行つた。零戦など63機の発進を見送ったが、未帰還機は12機を数えた。4日に「艦隊が大分湾に入港した」とのこと、10.19に漸く第一機動艦隊の旗艦「瑞鶴」に乗艦し、艦船下部電信室での敵信傍受の任務に就くこととなった。

10.20夕刻、艦隊は大分湾から豊後水道を出て、比島を目指し一路南下。10.25の朝、比島エンガノ岬沖にて米艦載機F6Fグラマンによる第一波の来襲に始まり、合計3波にわたる間断のない爆撃・雷撃を受け、第一機動艦隊の艦船が続々と沈められてゆく中、同日午後2時過ぎに近藤さんの乗艦していた瑞鶴は撃沈となつた。

沈没直前の「退去命令」で海に飛び込み、沈没時の渦に巻き込まれないように必死に泳ぎまくり、200m程も艦から離れた地点で瑞鶴は

### 【第一機動艦隊：17隻】

- ・航空母艦4：瑞鶴（旗艦）、瑞鳳、千代田、千歳
- ・戦艦2：伊勢、日向
- ・巡洋艦3：大淀、多摩、五十鈴
- ・駆逐艦：秋月、若月、初月、霜月、杉、桐、桑、楓

らの脱出の状況等生々しい話には強い衝撃を受けました。限られた時間でなかなか全てをお話しする事は容易でなかったかもしれません、特に印象に残ったことは、入隊前の神田電機学校の堀田先生の話です。私の当時の日本の軍隊に対するイメージは、「粗野、乱暴、問答無用、権威主義、精神論の一点張り」などなど例を挙げれば切りがないわけですが、そんな中、戦時下においても、堀田先生のようなスマートで暖かみを感じる人間の存在があったという話には安らぎを感じます。しかしながら手記によれば、1944年の春に兵役に復帰後、同年秋に南方で戦死されたとのこと。「戦争の最後の一年間で2/3の方が亡くなった」という言葉はガイドでも良く話すことであり、頭では理解していても実感することはなかなか難しいことと感じている中、囮艦隊の実戦の現場を体験者の方から直接話が聞けることなど、本当に貴重で有難いことです。

### 【レイテ沖海戦】

- ・1944年10月23日～25日
- ・捷1号作戦（史上最大の海空戦）：マリアナ沖海戦で勝利したアメリカ軍は、サイパン島を占拠し、我が国の絶対国防圏を突破して、国外の各拠点が占拠されることは、本土への資源輸送航路の停止を意味し全ての行動不能になる恐れがあった。その為に、陸海軍の残存戦力で、敵を殲滅するという一大作戦。
- ・レイテ湾上陸を援護する米機動部隊を誘い出す囮の小沢機動部隊と米艦隊の間で繰り広げられたのが「エンガノ沖海戦」。
- ・主な海戦：「シブヤン海海戦」「スリガオ海峡海戦」「エンガノ沖海戦」「サマール沖海戦」
- ・帝国海軍艦艇：空母4、戦艦9、重巡洋艦13、軽巡洋艦6、駆逐艦34

VS

- ・米国海軍艦艇：空母17、護衛空母18、戦艦12、重巡洋艦11、軽巡洋艦15、駆逐艦141

報告

軍艦の戦後－軍艦防波堤

運営委員 佐藤宗達

1945年9月2日、戦艦ミズーリ号で降伏調印式があり日本は敗戦を迎えた。稼動可能な軍艦は外地からの引き揚げ船として活躍したが、一段落すると他の任務に廻される船（特務艦・宗谷は最後南極観測船まで頑張った）、戦勝国に接收される船（よく知られているのはアメリカの水爆実験に供された戦艦長門）、戦利品として引き渡される船（駆逐艦・雪風は中華民国で1971年まで活躍した）もあるが、多くは解体され鉄スクラップとして売却された。

変わった例では埋め立て材料として沈設され防波堤の一部と化した。1948年3月、北九州市若松区の洞海湾のひびき灘に「涼月」「冬月」（いずれも戦艦大和と沖縄特攻に出撃、辛うじて佐世保に帰還）「柳」の3隻が防波堤として沈められた。荒波に揉まれ埋没していますが「柳」は外側をコンクリートで補強されて原型を留めております。波除にする場所ですから人の往来はなく釣り人が訪れる程度で

ですが、地元では軍艦防波堤と呼ばれて、知る人ぞ知る場所になっております。



防波堤となった駆逐艦「柳」

連載

## 海外の戦跡めぐり (11) マニラ市街戦・フィリピン共和国

運営委員 佐藤宗達

1944年10月、アメリカ軍を主力とした連合軍はフィリピン奪回に着手。レイテ沖海戦で日本の連合艦隊を撃破、レイテ島に上陸しその後ルソン島へ進攻した。日本の第14方面軍(山下奉文司令官)は司令部をマニラからルソン島北部のバギオに移して、山野での長期持久戦を計り、マニラ市民の被害を避ける事とした。しかしマニラ死守を主張する部隊が残留、1945年2月、連合軍と市街戦になった。戦力に勝る連合軍に日本軍は対抗できず撃退された。市内にはフィリピン市民が約70万人残留していたが約10万人が巻き添えで死亡している。東洋の真珠とも呼ばれたアジア最初の国際都市は廃墟と化し、焼け残ったのはサンチャゴ要塞とマニラホテルしかなかった。

☆サンチャゴ要塞

1571年、スペインはフィリピンを占領すると、マニラ湾に繋がるパシッグ川沿いに砦を築き要塞とした。周囲に堀を廻らせ、有事の際には橋を落として進入を防いだ。遺構は今でも現存しており、レンガ造りの兵舎跡、武器・弾薬庫跡、そして牢獄跡などが見られます。ここは1898年以降はアメリカが、1941年12月から1945年8月までは日本軍が使用しておりました。ことに牢獄は地下にあり、上潮になるとパシッグ川の水が流れ込み溺死する仕組みになっており、捕虜・政治犯などが処刑された跡です。



地下牢獄跡 入り口



サンチャゴ要塞 出入口

☆マニラホテル：

1898年、アメリカはスペインとの戦争に勝ち、フィリピンを有償で譲り受けた。マニラの都市計画はアメリカから専門家を呼び寄せ東洋一の街造りを目指した。首都マニラの玄関口マニラ港の西側に広大な土地を選び、1912年マニラホテルは開業した。1935年、ダグラス・マッカーサーは陸軍参謀総長を退任し、フィリピン軍の軍事顧問に就任。快適な宿舎を要望したので、マニラホテルにフィリピン初のクーラーを備え付けた特別室を造り提供した。これが今も現存するマッカーサースイートルームです。1941年12月、日本軍の進撃から逃れバターン半島で応戦すべく退去するまで、マニラホテルを本拠地としておりました。日本軍はマニラを占拠すると、マニラホテルに滞在中の敵国民をセント・トーマス大学に軟禁し、マニラホテルは日本軍人の宿泊場所となりました。また報道班員の宿舎でもあり文芸作品の中にも登場します。1945年2月のマニラ市街戦では建物は残ったものの、内部は破壊され、戦後の修復・増築を重ねておますが、今でもマニラ有数の格式高いホテルとして利用されております。なお1階の1部屋が資料室となっており、マッカーサー関係の資料、ホテルの歴史資料が展示されており、ホテルが軍事施設であったことを物語っております。



マニラホテル正面玄関

マッカーサー関係資料  
奥は愛用の椅子

報告

## 出征軍馬の水飲み場

運営委員 遠藤美幸

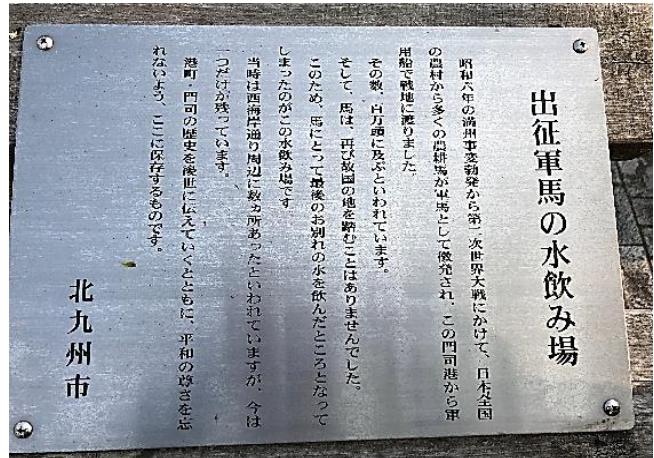
70数年前、北九州市の門司港から、200万人以上の兵士が南方や中国大陸に向けて出兵し、100万人は再び祖国の地を踏めませんでした。

実は戻って来れなかったのは人間ばかりではありませんでした。1931年の満州事変からアジア・太平洋戦争にかけて、日本全国の農村から農耕馬が「軍馬」として徴発されました。戦時期は国家総動員法の下、人も馬も一切がっさい、すべて動員されるような時代です。農耕馬にも徴用令が届き、農家は万感の思いで愛馬を送り出しました。戦争は、人間だけではなく馬や犬などの動物にも過酷な運命を強いたことを忘れてはなりません。こうして集められた100万頭に及ぶ「軍馬」が、この門司港から軍用船で戦地に渡りましたが、なんと1頭も戻って来ることができませんでした。

誰も見向きもしない海岸通りの片隅に、「出征軍馬の水飲み場」がひっそりとあります。この水飲み場で、馬たちは水を飲み、最後の別れをしました。当時は門司の海岸沿いに数ヶ所あった水飲み場ですが、現在はこの一つだけになってしまいました。



現在、門司に唯一残る出征軍馬の水飲み場



出征軍馬の水飲み場看板

**【付記】**

実は中国から帰国した軍馬が一頭います。勝山号という当時有名だった軍馬です。この馬は歩兵第一連隊所属で、1937年に中国に連れていました。連隊長の乗馬で「軍馬功章」を3回も受章し、負傷して1940年に帰国し、東部62部隊（東京・赤坂から、1942年に川崎市宮前区に移転）にいました。敗戦後、持主だった伊藤新三郎さんの家（岩手県）に戻ったそうです。

（山田 譲・記）



戦没馬慰靈像 靖国神社 遊就館前広場

**【北九州市若松区】**  
(洞海湾ひびき灘)  
軍艦防波堤

**【防府市】**  
・**1944.1** 近藤さん  
防府通信学校に

**【大津島】**  
**1945.3** 岩井忠正さん  
大津島「回天」  
基地に行く

**【山口県光市】**  
・**1944.11** 岩井忠正さん  
光基地にて人間魚雷  
「回天」の訓練受ける

**【門司港】**  
・出征軍馬の水飲み場  
・余談ですが、**1944.7.3** 私の父は（当時21歳）ここ門司港から大型外航貨物船「日昌丸」に乗船し、魔のバシー海峡での米潜水艦の魚雷攻撃を何とかかわし、比島ミンダナオ島での戦闘に加わることになりました。 小山

**【大分湾】**  
**1944.10.20**  
空母「瑞鶴」  
大分湾を出港

## 報告

## 地域のチカラ最終報告

運営委員 小山信雄

3月9日(土)、港北区役所4階会議室にて、“地域のチカラ応援事業・平成30年度最終報告会”が開催されました。チャレンジコース19団体の内、13団体が発表を行う事になり、日吉台地下壕保存の会は、前年度に引き続き、そして5年の最終年度ということで発表を行いました。5名の応援事業推進懇話会委員の方々と約50名ほどの参加者・観客の皆さんに向かって、持ち時間8分間(時間厳守)の最終報告を行い、その後質疑応答となりました。

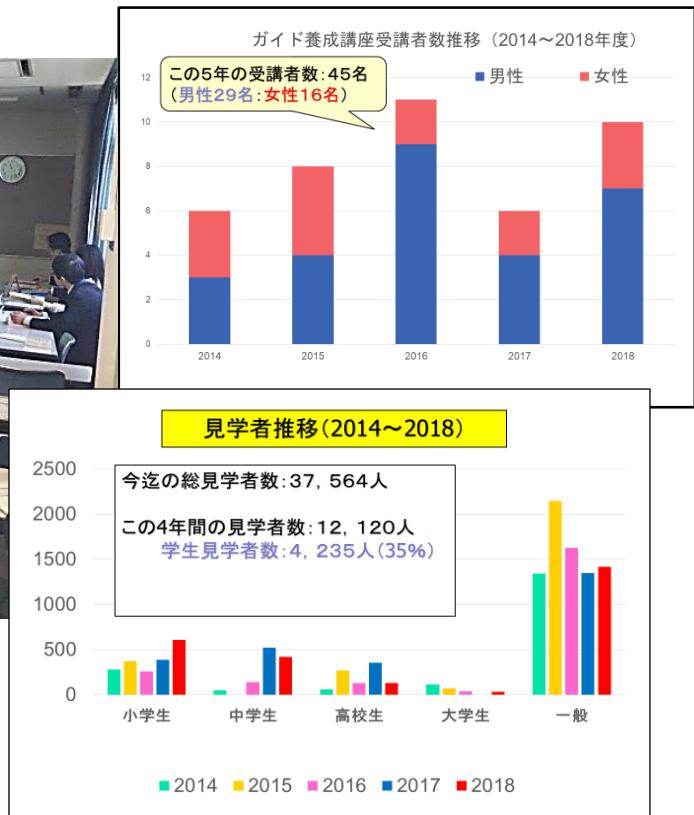
私達の主要テーマである「事業名(ガイド養成・人材育成)の5年間(最終年度)を振り返って」という趣旨で報告を行いました。この5年間(今年年初から始まっている最新の養成講座も含め)で、合計45名(男性29名、女性16名)の受講者があり、現時点で8名(男性6名、女性2名)の新しいガイドが誕生し、日々の見学会で活躍している成果を報告しました。同時期の見学者数は12,120人となり、35%を学生(小・中・高・大学)が占めていますが、特に「日本の近現代史学習のサポート」「地域理解を深めてもらう」という趣旨の下、小中学生への見学会に力を入れている現状を説明し、港北区内の中学生として初めて、全9クラス346名(横浜市立大綱中学校2年生)の見学会を実現させたことなどを取り上げました。授業の一環となるため、平日3日間に分けての対応となりましたが、実現可能となった最大の要因は、対応出来るガイドが充実して来たことです。

特に今年度の養成講座には、10名(男性7名、女性3名)の受講者の参加となり、実際の見学会での同行も積極的に参加してもらっています。チャレンジコースとしては今回で終了となります。引き続き、ガイドの人員確保と質の向上を図って、日吉台地下壕を一人でも多くの人に知って貰えるよう努力してゆくことには変わり有りません。

懇話委員のお二人から、「テーマ的にイデオロギーになると伝えにくいのか。歴史として、人の言葉で、真実を伝えてゆくことが大切なこと」、「小中学校の学習指導要領にも、戦争というテーマは入っているはず。社会科学研究会などの先生とのネットワーク作りも大切なでは。また、専門性が高まって内向きな活動になってしまったら残念なことなので、敷居低く広がって行く活動になっていって欲しい」などの大変貴重なご意見も頂くことができました。5年間、大変有難うございました。



日吉台地下壕の平成30年度最終報告



**連載****日吉第一校舎ノート（16）正面玄関の鷲（その2）**

会長 阿久沢 武史

1933年1月、ヒトラーは政権を掌握した。日本では前々年の昭和6年（1931）に満州事変が勃発、翌昭和7年（1932）3月には満州国の建国を宣言、5月には五・一五事件が起き、首相の犬養毅が海軍の青年将校によって暗殺された。続く昭和8年（1933）3月には国際連盟を脱退。ファシズムが台頭し、大陸への進出を深めていく。ナチス・ドイツの国章である鉤十字の上に翼を広げた鷲の図像は、1933年の権力掌握の以前からナチス党によって使われており、ドイツにおける鷲は神聖ローマ帝国以来の国家統合と民族主義のシンボルであった（アラン・ブロー『鷲の紋章学』平凡社、1994年）。しかし、この鷲と正面玄関の鷲とを安易に結びつけることはできない。第一校舎が竣工した昭和9年（1934）の日本は、まだ日独防共協定（1936年）も、日独伊三国同盟（1940年）も結んでいないからである。

そもそもヨーロッパの神話世界における鷲は、権力や武力とは無縁であった。『神話・伝承事典』（大修館書店、1988年）によれば、鷲は「古代の靈魂・鳥。太陽神。火。稻妻と関連する理想のシンボル」であり、地上に姿を現したあと天界に戻る「神の靈魂」と考えられていた。シンボルとしての鷲の本質は、天高く飛び、地上と天上を結ぶところにあった。ギリシア神話では最高神ゼウスの使いとなり、同時にゼウスそのものにもなる。キリスト教ではキリストの昇天と復活に重なり、特に使徒ヨハネと関わり深いものとして理解されてきた。鷲は天高く飛び、太陽を直視する。そしてその鋭い目で遠くまで見通すことができる。鷲は地上と天上を結び、天空高く飛翔し、太陽を凝視する鋭い目で物事の真理を深く知る。この「飛翔」と「知性」のイメージこそが、鷲の神話的意味の本質であった。やがて世俗の権力と結びつけられ、神聖ローマ帝国の皇帝の「力」のシンボルとして通俗化されていくことになる。12世紀になると紋章が確立し、皇帝あるいは王侯の代表的な紋章として広がり、ドイツ帝国に受け継がれ、第三帝国としてのナチス・ドイツの国章も、その伝統の中で成立していく。

「知性」のシンボルとしての鷲か、「力」のシンボルとしての鷲か。ペンの徽章との連関の中で、どのように考えればよいのだろうか。玄関ホールの円柱は、なぜか八本すべてが鷲の図柄の上に立っている。武力を否定するためにその上に柱を立てたのか、それとも知性の土台の上に柱が直立するということか。網戸はこのことについて何も書き残していない。しかし、作り手の意図はそこに必ずあったはずである。鷲を「知性」と捉えれば、ペンとの共通性が強くなる。一方で鷲を「武力」と捉えれば、逆にペンの意味が際立つことになる。それはちょうど「ペンは剣よりも強し」を象った和田英作による三田の図書館（旧館）のステンドグラスを想起させる。甲冑に身を固めた武士が白馬から降り、ペンの徽章を手に持つ女神を迎える。女神の背後から射す幾条もの光は近代の「自由」の光であり、封建的な価値観に縛られた武士の心を解放するように明るく照らす。

三田の図書館は明治45年（1912）に竣工、設計は曾禰中條建築事務所であった。その約20年後、日吉開設にあたってキャンパスの全体設計を統括したのは中條精一郎であり、当初は第一校舎と第二校舎の間、現在の日吉記念館がある場所に大講堂を建設する予定であった。そして、大講堂の大広間壁上には、もともと「福沢塾訓」（「慶應義塾の目的」か）を天然石の板に彫り込む構想があり、中條も網戸も強く希望したが、義塾の意向で採用されなかつたという（『建築・経験とモラル』）。ペンと鷲、この取り合わせには容易には解けない謎が残る。しかし、校舎のメインエントランスにふさわしく、ここに建学の理念のシンボルとなる図柄を置いた設計者の意図を読み取ることはできると思うのである。

※本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第46号（2015年）に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート（二）クラシックとモダン」の再録となります。

連載 地下壕設備アレコレ【25】

## 海軍の「カマボコ兵舎」と壕内「寝台」

運営委員 山田譲

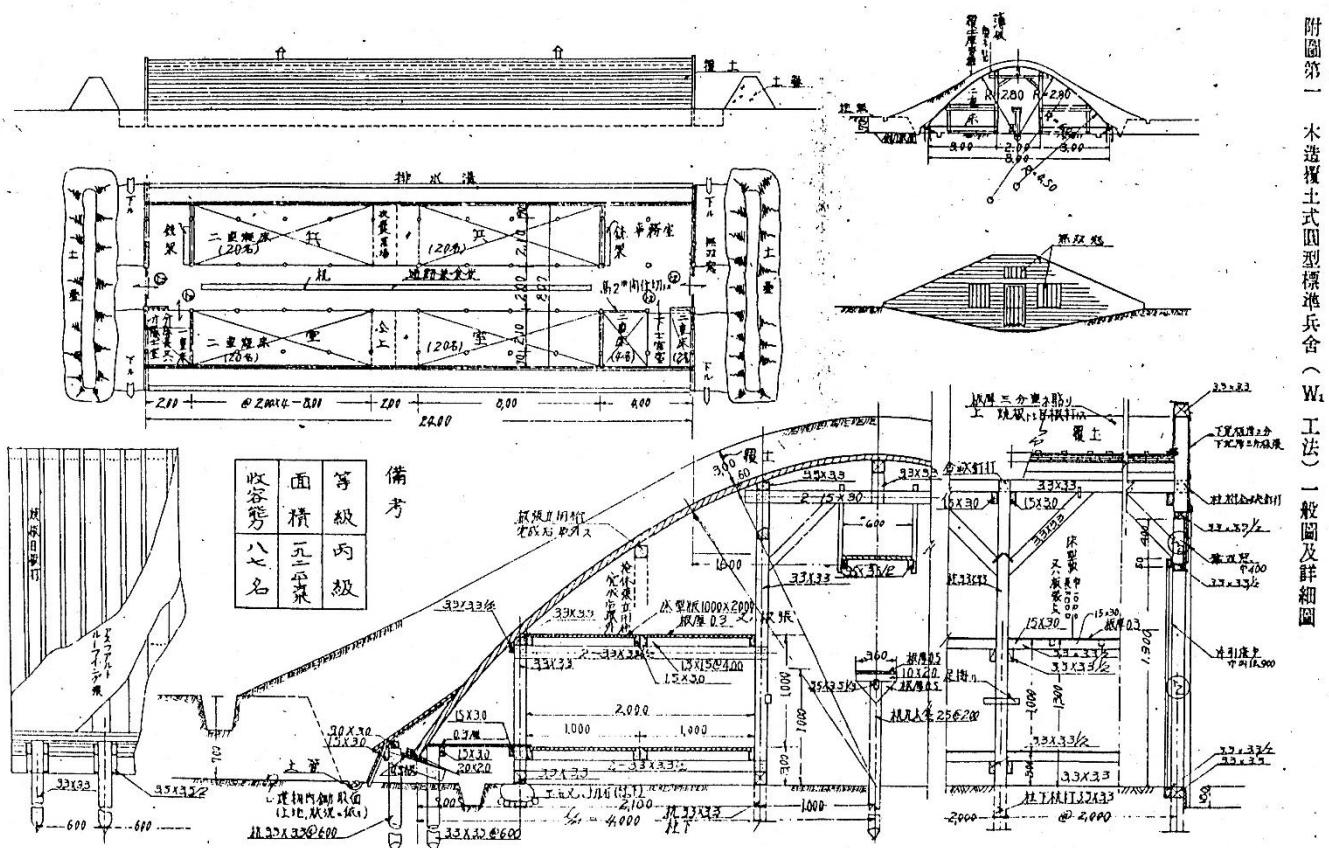
昨年、逝去された当会の副会長新井揆博さんの遺品の中に、私の知らなかつた海軍設備関係の貴重な資料ファイルがいろいろありました。それらは防衛省防衛研究所戦史室所蔵資料のコピーです。

その中で私の目にとまったのは、①昭和5年、海軍省次官より逓信省次官宛「管制線工事施工に関する件 依頼」②「決号作戦通信計画要領——海軍総隊司令部の作戦（通信）準備」③「築城隧道（小型）設計基準」④「隧道並に木造覆土式居住施設設計基準」です。

このうち③は、設備アレコレ【22】「地下壕出入口の『爆弾防護施設』」(会報 135 号)で紹介した佐用泰司・元設営隊技術大尉著『基地設営戦の全貌』に掲載されていた「隧道出入口等の防護」の添付図面の原図(出典)になっていたものでした。今後、順次紹介していくと思いますが、今回は④を紹介します。この「隧道並に木造覆土式居住施設設計基準」という文書には、日吉の通信兵が使った「カマボコ兵舎」と、地下壕内の二段ベッドの図面が添付されていました。

普通、カマボコ兵舎というと米軍が戦後つくったトタン屋根の簡易兵舎を思い浮かべますが、ここで言う「カマボコ兵舎」は日本海軍がつくったもので、日吉の元通信兵の方たちがそのように呼んでいた建物です。この文書に「木造覆土式円型標準兵舎（W1工法）一般図及詳細図」という題の図面があります（付図参照）。ここに書かれている「W1工法」というのは海軍施設本部の用語で、「偽装隠蔽」のための「木造アーチの覆土半地下式」の「築城技術」（『海軍施設系技術官の記録』）のことです。

この図面によると、この兵舎は全長 24m、幅 8m で、まるで弥生式住居のよう地面を 70 cm 堀り下げ、周囲を溝で囲っています。床面から天井までの高さは 2.8m、ゆるやかなアーチ型の屋根で、細長い木板を「目板打」といって少しづつ重ねあわせて屋根を葺き、その上を「アスファルト ルーフィング張」にして、さらに 30 cm の土をかぶせて（「覆土」）います。

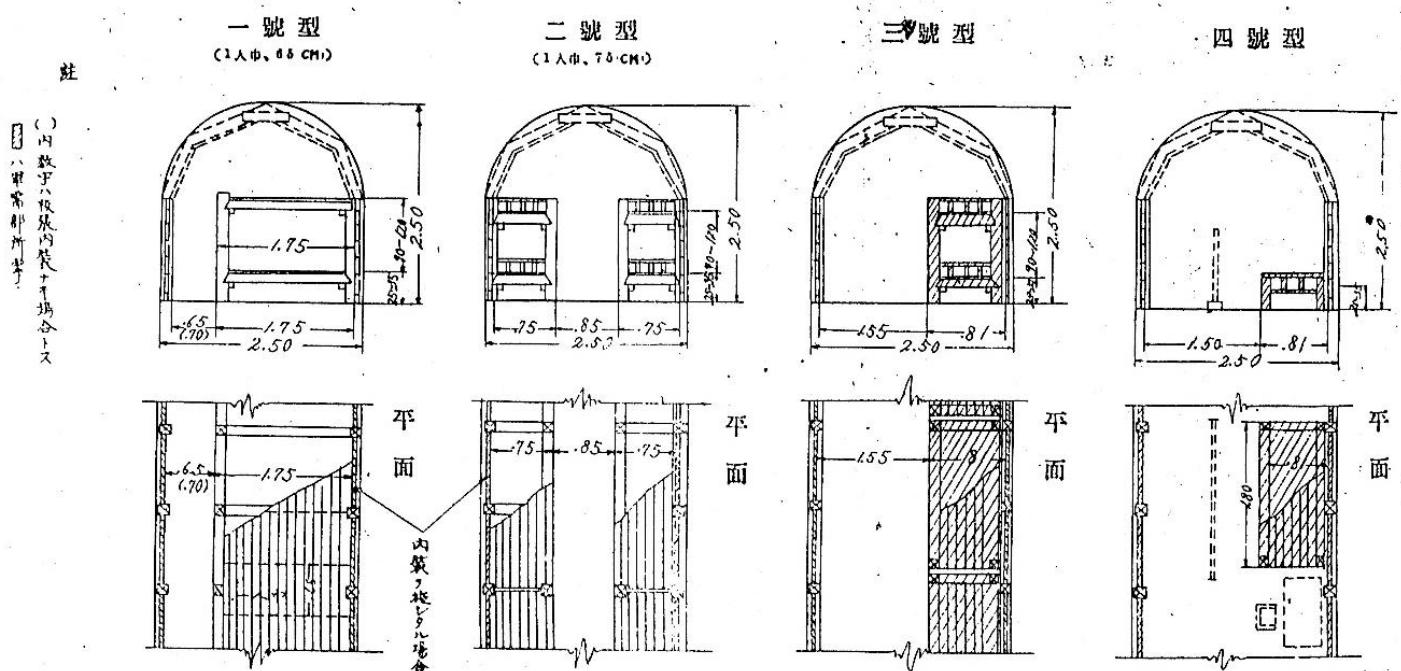


内部には木柱が立っていて中央に通路があり、そこに幅36cm、高さ1mの細長い「机」があります。「通路兼食堂」とかかれているので、どうやら立ったまま食事をするようです。通路の両側に、「二重寝床」と書かれた2段の板張りの台があり、その大きさは幅2m、長さ8mで、これが4台配置されています。各々に「20名」「兵室」と書かれていますから、一人分の幅は80cm、長さは2m、高さは1mです。他に下士官用「二重床」と士官用「一重床」が兵舎の両端にあります。この兵舎の備考として「等級丙、面積192m<sup>2</sup>、収容能力87名」と書かれています。出入口は両端にあり、出入口の前には「土嚢」を積み上げてあります。出入口を爆撃から守ろうというわけです。屋根には煙突が2本ついています。両端に小さな窓があるだけで、ほとんど穴倉です。柱も33mm角で細く、こんな造りでは耐弾性はゼロです。機銃掃射にも耐えられません。こんな兵舎に水兵たちは詰め込まれていたようです。

もう一つは「居住用隧道内寝台配置標準」です。こちらは一号型から四号型まであり、兵士、下士官用は一号型です(付図参照)。内径2.5×2.5mのアーチ型地下壕内に2段ベッドを置いてあります。日吉の海軍の場合は、壕内の片側にベッドがあったという聞取りがありますので、この一号型に該当するようです。ちなみに二~四号型は士官用とされています。寝台の幅は65cm、長さ1.75m、高さ90~120cm。ギリギリのサイズです。「隧道内面板張り内装は施工せざる方針」と書かれているので、壁は基本的にむき出しです。日吉で勤務した元電信兵の高田賢司さんは、地下水が上から垂れてきて疥癬(ダニによる伝染性の悪質な皮膚病)にかかりてしまい、一人だけカマボコ兵舎に移されたそうです。しかしそこでは、今度は階級が上の少年兵に邪魔にされ、毎日殴られたそうです。いずれにしても、この「隧道内寝台」設備は湿気と漏水でひどい居住環境だったようです。それでも硫黄島や沖縄の洞窟陣地よりは、だいぶましですが。

他方、こういう劣悪な兵士用居住設備に対して、将校たちの住んでいた地上の寄宿舎は天国です。司令長官などは檜風呂まで持つて来させて、水兵にお湯を運ばせていました。地下の長官居室も、畳敷き、床の間つきだったという証言があります。まさに特権階級です。軍隊の上下の格差のはげしさに唖然とします。

附圖第二 居住用隧道内寝台配置標準



## お知らせ

### 第24回 2019 平和のための戦争展 in よこはま 5月29日・横浜大空襲から74年

☆会場：かながわ県民センター（横浜駅西口）

☆特別企画1 戦争と子ども

**5月26日（日）16:30 開場 17時～19時30分 2階ホール**

講演と映像「駅の子の闘い～語り始めた戦争孤児」東條充敏さん

講演「横浜の戦争孤児を救った民間社会事業団体」西村 健さん

講演「沖縄子どもの貧困白書」加藤彰彦さん

☆特別企画2 戦争・平和・若者

**6月2日（日）13:00 開場 13:30～16:00 2階ホール**

挨拶と講演「若者とともに学校をつくる」小山内美江子実行委員長

講演「登戸研究所から考える戦争と平和」渡辺賢二さん

朗読劇「米軍機墜落事故の悲しみから」桐蔭学園演劇部

報告「歩いて戦争を知る～広島そして横浜」NGO グローバリー（市大生他）

☆展示 横浜大空襲他 約500点 5月31日（金）～6月2日（日）

10:00～19:00（6/2は18時まで）一階展示場

★今年も日吉台地下壕の展示があります

### 第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会2019年 —戦争遺跡の保存活用と地域をつなぐ平和活動—

☆会場：国際交流会館（熊本市中央区花畠町）

☆日程：**8月24日（土）13:00～ 全体集会・講演会**

①記念講演「熊本城と軍都熊本」大阪大学名誉教授 猪飼隆明氏  
基調報告（出原恵三氏）・地域報告（高谷和生氏）

②全国交流会 18:00～

**8月25日（日）9:00～16:00 分科会**

☆フィールドワーク参加費 一般1日1,000円 学生1日500円

**8月26日（月）現地見学会 別途事前申込みと参加費が必要**

Aコース（9時～12時半）熊本市内の戦跡をめぐる

Bコース（9時～15時）菊池飛行場と黒石原奉安殿をめぐる

## 活動の記録 2019年1月～4月

- 1／16(水) 地下壕見学会  
駒林小学校6年生 80名
- 1／24(木) 会報137号発送  
(来往舎205号室)
- 1／26(土) 定例見学会 44名
- 1／27(日) ガイド学習会(菊名フラット)
- 1／30(水) 地下壕見学会  
慶應義塾湘南高校3年生 58名
- 2／5(火) 運営委員会(来往舎205号室)
- 2／6(水) 定例見学会 27名
- 2／8(金) 地下壕見学会  
岐阜大学田島ゼミ 8名
- 2／23(土) 定例見学会 21名
- 3／6(水) 運営委員会(来往舎205号室)
- 3／9(土) ガイド養成講座② フィールドワーク  
(日吉キャンパス・日吉の丘公園周辺)  
港北区地域のチカラ応援事業最終報告会  
(港北区役所 4階会議室)
- 3／12(火) 地下壕見学会 田園調布学園高校 33名
- 3／13(水) 定例見学会 57名
- 3／18(月) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
- 3／23(土) 定例見学会 47名
- 3／24(日) ガイド学習会(菊名フラット)
- 4／6(土) ガイド養成講座③ «戦争体験を聞く» (来往舎中会議室)
- 4／10(水) 定例見学会 25名 (雨のため地上部をカット)
- 4／21(日) 三多摩戦跡バスツアー 参加者25名



**飛燕と八重桜**  
調布飛行場周辺に作られた  
掩体壕にて

### ★地下壕の定例見学会は予約申込が必要です。

- 原則として毎月2回実施(第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13時～15時30分)定員60名。定員に達している日もあります。
- 定例見学会以外に「夏休み見学会」として7/31(水) 8/3(土) 8/7(水) 8/10(土)を予定しています。(定例の8/24(土)は実施しません。)

**★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで Tel/Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)**

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会